大問一

問１
①隠蔽　②経緯　③布置　④存立　⑤中枢

問２
①（Ｆ）　②（Ｅ）　③（Ａ）　④（Ｄ）　⑤（Ｇ）

問３
【出題意図】言文一致運動の具体的な内容と、その背景を読み取れているかを評価する。

問４
【出題意図】もともと「顔」はどういうものとしてあったのか、「漢字」というたとえが何を意味するのかを適切に読み取れているかを評価する。

問５
【出題意図】「演劇の改良」以前／以後の演技の変化を「内面」との関わりからとらえているか、具体的に何がどのように逆転したのかを理解し、簡潔に説明しているかを評価する。

問６
【出題意図】文章の全体をつうじて、従来の言説（文字と音声の関係をめぐる言説）の要点を理解しているか、従来の言説に対する著者の批判的な立場をとらえているかを評価する。

大問二

問１

【出題意図】大阪の言語形式の特徴が、相手に対する異質な態度・姿勢を共存させ得る表現だということが踏まえられているかを問う。

問２

【出題意図】文章中に紹介される様々な表現形式の意味・機能の共存について具体的に読み取れているかを問う。

【解答例】A　相手への尊敬など／垣根（壁）を取り払う、など

B　自分の意見・主張など／相手への尊敬など

C　自分の意見・主張・命令など／相手と同じ気持ちの確かめ・共感、など

問３

【出題意図】具体例を筆者の視点から解釈し、言語化できているかを問う。

【解答例】（ア）対立的な関係性、自分と相手が百八十度向き合ってしまう関係性、など

（イ）　自分と相手とが同じ角度からものを見ているという表現態度、など

問４

【出題意図】筆者の言う「複眼的な表現」に関する説明部分を具体的な表現を入れて理解することができるかを問う。

【解答例】A　尊敬　B　命令

問５

【出題意図】筆者がこれまで述べて来た大阪のものの言い方の特性の要因について読み取れているかを問う。その際、重層的表現がつくり出される社会的背景に触れる記述や、そうした表現の産出過程に触れる記述を踏まえながら筆者の主張をまとめられているかを見る。

大問三

問１
① わが身をいったいどちらへやったらよいのだろうか。
② （私ばかりでなく）花までもが世の中を憂いものとして、（水面に散って）浮き草のようになってしまった。

問２
ア：作者の心深く悩ませる所侍れば（、）
イ：「悩ませる」という言葉に、作者の心のすべてが込められているため。（※「歌の姿にふさわしいものとして、新しく言い出された批評の言葉である」ことを付け加えても可。）

問３
藤原定家は良い判詞を記してくれること。

問４
ほめた理由：格調が高くなり、心も深くこもり、趣もあるように思われたため。（また、過去の思い出も事実以上に思い出すのが良いが、「春」とすると心の深くなる趣が一段と面白く感じられるため。）

従わなかった理由：歌柄（歌の声調）が「花さへに」などと歌いはじめてあとの句に続いており、その姿が軽い調子で運んでいるため。